

## 調査票調査における「社会的望ましさ」バイアスの検証

——実験的デザインにもとづくモード比較調査データによる分析——

金沢大学 小林 大祐

### 1 目的

この報告の目的は、調査票調査における回答に偏りを生じさせる調査員効果のうち、「社会的望ましさ」バイアスに焦点を当て、その影響について確証を得ることである。これまでも「社会的望ましさ」バイアスの存在は多くの研究で示唆されてきたが、その存在を明確なかたちで示した研究は多くない。これは、従来の研究の多くには、①実験的デザインに基づいていない、②「社会的望ましさ」バイアスの識別が難しい、という点で限界があったためである。本報告では、この困難にモードを無作為に割り付けた実験的デザインを採用したデータを用いること、調査対象者の属性によって「社会的望ましさ」の大きさや向きが異なることが予想される事柄に関する質問項目を用いることによって対処した。

### 2 方法

本報告で使用するのは、社会調査法研究会が2014年10月から2015年1月にかけて、首都圏4都県在住の30歳から59歳までの男女を対象に行なった「IT時代における暮らしと社会に関する調査」のデータである。この調査は、当初より調査モードの比較を意図してデザインされており、選挙人名簿から抽出された標本が、CAPI、PAPI、CASIの3つの調査モードにランダムに割り当てられていることにより、時点以外の共変量が統制されている。したがって、3つの調査モード間の回答における分布の違いは、基本的に調査モードの違いによって生じたものと解釈できる。対象者は層化二段無作為抽出法によって、まず20地点が抽出され、そこから各地点54人の計1,080人が抽出された。有効回収数(率)は、CAPIが132(36.7%)、PAPIが126(35.0%)、CASIが126(35.0%)であった。このなかでも、回答に対する「社会的望ましさ」の働き方が性別によって異なると考えられる内容に関してたずねた項目に焦点を当てる。同様のタブレットを使用しながらも他記式と自記式の違いがあるCAPIとCASIという2つの調査モード間で、これらの項目の回答分布が異なるかどうか、そしてその傾向性が性別によって違っているかどうか共分散分析によって検討した。

### 3 結果

男女で「社会的望ましさ」の影響の強さが異なることが想定される項目のうち、「女性の社会進出を政府が支援することへの肯定度合い」については、CAPIと比べてCASIにおいて女性では高まる一方、男性では低くなるといった対照的な傾向が見られ、性別とモードの交互作用項が5%水準で有意となった。ただし「喫煙本数」や「性別役割分業意識」については、そのような傾向が有意な効果としては見られなかった。

### 4 結論

分析結果から、タブレットPCを用いた調査モードにおいても、自記式モードと比べて他記式モードにおける回答は、より調査員の存在によって影響を受けていることが確認され、その影響を社会的望ましさバイアスとして解釈することに整合的な傾向も一部得られた。今後は歸山・小林・平沢(2015)のような、傾向スコアを用いた共変量調整によって、モード間の無回答誤差の差についても考慮した、より精緻な検証を行っていく必要があるだろう。

謝辞 本報告はJSPS科研費16K04030, 25285147, 16H03689の助成を受けたものである。

### 文献

- 歸山亜紀・小林大祐・平沢和司, 2015, 「コンピュータ支援調査におけるモード効果の検証: 実験的デザインにもとづく PAPI, CAPI, CASI の比較」『理論と方法』30(2):273-292
- 小林 大祐, 2015, 「階層帰属意識における調査員効果について: 個別面接法と郵送法の比較から」『社会学評論』66(1) 19-38.